

巻頭言 「ばかばかしい遠慮」

宇野 元

芥川龍之介は、社交家のわりに気の弱いところがあったそうです。洒落がうまく、ひとから好かれた。しかし内面においては絶えず傷ついてばかりいたというのです。芦屋にゆかりのある谷崎とは高校と大学が同じで、芥川はよく、われわれは気が弱いから駄目ですな、と言っていたとか。また芥川は、世話になった人に礼状を欠かさないという律儀な一面をもっていました。旅先から帰ると、まず礼状を書いて、それから仕事に向かったとのこと。けれども、そうした心遣いが、忙しくなる仕事と家族との生活のなかで、しだいに重荷になっていったようです。彼は自分について「ばかばかしい遠慮ばかりしている人種」と書いています。一方では、西欧の書物をとおして近代市民社会の自由な空気に触れ、独立した個人でありたいと願いながら、人間関係のしがらみから自由になるどころか、自分のなかにある気弱さに深く悩み、疲れていた。

私たちにも重なるところがあると思います。人とつきあう難しさと共に、人を気にする弱い自分を見じめだと思ってしまう。芥川のように心配りが細やかな人であれば、それだけ苦しく、つらい、そういうことがあるでしょう。中村真一郎によれば、芥川が社交家であったのは、気の弱さの裏返しでした。太宰もそうだったと思いますが、他者を喜ばせることが、自分を真実に生きていることにならず、かえって、他者の目にこだわり、自分を殺してしまう。そんな悩みを抱えていたのでしょう。若いころの芥川は、晩年の姿からは想像できない明るさがあったと言われます。また、柔らかい心の持ち主であったと多くの人が証言しています。そんな彼が心身を摩り減らしていったのはじつに痛ましく思われます。

いろいろな心遣いに疲労する、私たちの心にたいする聖書のアドバイスは単純です。誤解の多い他者の目よりも、不確かな自らの判断よりも、正確に見ている、そして私たち自身よりも深く私たちに顧みている存在に心を向けなさい。イエス・キリストにおける神がそれです。神？　そうです、現代に生きる私たちにも信頼できる神が存在しています。イエス・キリストを見つめる。その言葉、その生と死と復活について聖書が語る場所に虚心に耳を澄ます。そこにこの存在が示されます。芥川は、キリストの苦しみを自分に重ねてみていたふしがありますが、まさにイエス・キリストは私たちの苦しみをなめつくしたと聖書は語っています。そして勝利したと。私たちの人生は、私たちが愛する神と共にある。この神に自分をまかせることは、重い心にただちに劇的な効果をもたらす処方箋ではないかもしれませんが、しかし最も確実で、最も頼りになる方法です。